



Title	シュトラウス「イエス伝」の諸版をめぐる考察
Author(s)	千葉, 智子
Citation	基督教学, 36, 23-24
Issue Date	2001-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46639
Type	journal article
File Information	36_23-24.pdf



シュトラウス『イエス伝』の諸版をめぐる考察

千葉 智子

D・F・シュトラウスは『イエス伝』によって聖書解釈の新たな局面を開いたが、その衝撃はキリスト教界にとどまらず政治や文学の領域にも及んだ。しかしその著作が甚大な影響力を与えたにもかかわらず、シュトラウス自身は独創的かつ体系的な神学を構築し得なかったこともまた事実である。それゆえに私は『イエス伝』を理解するための複合的な視座が必要であると考えたのである。『イエス伝』の座標軸を定める上でまず念頭に置くべきことは、この著作が構想の段階から初版を経て第四版の出版まで、数年の間に大幅な加筆訂正が施されているという事実である。この間の経緯と異同の所在を明らかにすることが、研究全体を支える基礎的な作業として

最初に取り組まれねばならない。

シュトラウスは一八三二年、メルクリンにあてた書簡で『イエス伝』の構想を明らかにしている。構想では三部構成で、第一部は伝統的ないし肯定的な部分、第二部は批判的ないし否定的な部分、第三部は教義的ないし回復的な部分と名付けられていた。シュトラウスは後に振り返って、この構想の第二部が実際の『イエス伝』の本体を構成することになったため、『イエス伝』というタイトルに「批判的に検討された」という表現を加えたと述べている。執筆の準備段階で福音書の解釈に関して膨大な文献調査が行われた結果、第二の批判的部分が構想全体を吸収することになったのである。構想での第三部にあたる教義についての批判にもページが割かれてはいないが、「独立した著作の対象となるべき」であると但し書きされている。初版出版後、一年足らずで第二版が要求されたシュトラウスは、F・C・バウルからの助言を得て、緒論に三節を加え、神話的解釈について詳しく論じている。特に一五節「福音書の物語における神話的なものを見分けるための基準」は、シュトラウスが自らの

聖書解釈をいかなる文脈に置くのかということについて、重要な示唆を提供するものである。第三版の序言では初版と比べて挑発的な論調が驚くほど和らいでいる。シュトラウスはそこでヨハネ福音書の歴史的な信頼性に対するそれまでの疑いを取り下げており、それに伴って本論でも奇跡物語についてのより合理的な解釈を示している。また結論の節では全体が書き直されて、より調停的なキリスト論が提示されている。これら第三版における「讓歩」の背景には、『イエス伝』に対する非難から職を失ったシュトラウスの配慮を見る必要があるだろう。

一八四〇年『キリスト教信仰論』と同時に出版された第四版の序言で、シュトラウスは第三版における変更が自分でも不思議に思うような不当な変更であると認めた上で、以前の版における解釈を回復することを宣言している。さらにこの第四版はジョージ・エリオットの翻訳によって広く英語圏にも普及し、当時の文学的な状況にも影響を与えたという見地からも重要である。

以上のような相違を考慮すると、『イエス伝』はいわば観客の反応に応じて筋書きが変えられた一幕の舞台で

あったと見ることもできる。そこではそれぞれの場面に即した見方が要請されているのである。例えばシュトラウスの神話概念について考察する場合、第二版以降で付加された、彼自身が自らの神話概念を詳述した節の検討が不可欠となるであろう。また第三版での「讓歩」は、当時の時代状況と照らし合わせて初めて理解できるものとなるのである。従って『イエス伝』の座標軸を定める際には、それぞれの版の特徴を考慮した上で、考察の基本となる版を定めることが可能であり、かつ必要な作業として位置づけられねばならない。